



「校長通信」に改称します

昨年9月10日に保護者の皆様に教育情報を共有するために、校長が責任編集をして、新たに保護者向けの教育情報「南十字星P」を刊行しました。「南十字星」は浦和南高校校歌にもあり、南高のシンボルです。これにParents（保護者）のPを合わせて「南十字星P」として7号まで発行しましたが、今年度からは「校長通信」と改称しました。

「動けば心がついてくる」～まずは「知っていること」をひろげましょう～
「動けば心がついてくる」。

卒業生が残した言葉です。じっと椅子に座ったままで、ある日突然進むべき道が開けることはありません。自分自身が行動することにより人と出会い、時には壁にぶつかる。そしていろいろな体験をすることにより多くのことを学ぶ。その過程の中で人は成長し自らの進むべき道を見つけるのです。このことを一言で表したのが、この言葉です。自分のこれから先を考えるためには、自らが動くことから始まります。

私自身、振り返ってみると、大学4年生になって就職活動をして、世の中の現実に気づきました。私は大学で歴史（日本中世史）を専攻しました。親からは就職に苦労すると言われましたが、歴史学は全ての学問の基本だと思っていたので全く心配していませんでした。学んだ歴史学を生かしつつ人と接する仕事につきたいと思い、教員のほかに民間企業の就職活動もしました。そこで知ったのは、実社会と学校社会との乖離でした。就職協定や男女雇用機会均等法などの建前と実社会の実態の違いを知りました。出身大学や出身学部により就職試験の機会すら与えてくれない業界があることに唖然としました。民間企業の内定を複数もらいました（自分では十分な企業研究をしたつもりでしたが、現在ではどの企業も、というよりはその業界自体が苦戦しています）が、大学卒業と同時に埼玉県立高校教員になりました。

現役の大学生でも、自己分析や企業研究を進めても、「やりたいことがない」「志望企業が選べない」と悩む大学3年生も多いようです。むしろやりたいことがないのは、何にもとらわれず、チャンスが訪れたときにさっとなつかめるオープンマインドの状態。全然悪いことではありません。

有名なキャリア理論の一つに、スタンフォード大学のジョン・D・クランボルツ教授が提唱した「計画された偶発性理論」というものがあります。これは「個人のキャリアの8割は偶発的に決定される」という考え方で、キャリアを予想して積み上げるのではなく、偶然訪れたチャンスをつかんで設計していこうというものです。

大切なことは、自分が知っている世界を高校段階から広げるように努めることです。なぜなら、「やりたいことは、知っていることの中からはしか見つけられない」からです。

1年次生は学習スタイルを定着させましょう

1年生は、入学早々の4月15日、16日の2日間、校外ホームルーム合宿を行いました。高校生としての生活スタイルの確立が目的のため、高校の学習やipadの使用方法など学習面が中心の合宿でした。生徒の感想文からは、「最初は不安でいっぱいだったが、楽しかった」など概ね好評だったようです。円滑に高校生活を送ってもらえればと思います。

高校の授業は中学よりも授業進度が速く、内容も難しくなっています。授業の内容についていけず「お手上げ！」とならないために、1年次生の早い段階で学習スタイルを定着させましょう。

学習スタイルの基本は、[予習]→[授業]→[復習]です。まずは、予習をして、自分がわからない箇所がどこかを明らかにしたうえで、授業に臨みましょう。そうすることで、自分が聞かなければならない箇所に特に集中して、授業を受けることができます。そしてなにより復習をすることで理解度を確認し、さらに知識を定着させることが大切です。もし理解できていない箇所があれば、先生に質問しに行くなどして、できるだけ早く解決しておきましょう。

自分が理解できていなかった箇所は、1週間後に再度復習をするとより効果的です。部活動が忙しく、その日のうちにできなかった場合は、週末に補うなど自分にあった学習スタイルを確立しましょう。

共通テストの「英語民間試験」導入を断念へ…2025年以降、記述式問題も

今年から始まった大学入学共通テストが始まりました。新型コロナウイルス感染拡大の中で明確になったのは、各大学の個別入試が感染拡大等で中止になった場合、共通テストで選抜が行われるということです。今年2月13日の福島県沖の地震の影響で、東北新幹線が2月23日まで不通になりました。早稲田大学など東京の私立大学の一部では、東京で受験できない東北地方の受験生には、共通テストの結果で選抜をすることとしました。国公立大だけでなく私立大を含め、万が一の時は共通テストでの選抜があるということです。1月の大学共通入学テストを目標とした学習計画を立てるようにしましょう。

実は、現在の中3生から対象となる2025年の大学入学共通テストから共通テストの刷新をする計画です。報道によると、2025年以降の大学入学共通テストで、記述式問題と英語民間試験が導入されない見通しとなりました。4月20日に開かれた文部科学省の有識者会議で、英語民間試験が主な議題となりましたが、導入に否定的な意見が相次ぎました。前回は記述式問題の導入を断念する方向でほぼ一致。文科省は会議の結論を踏まえ、今夏までに正式決定する予定です。

共通テストは大学入試センター試験の後継で、今年1月に初めて実施されました。当初は国語と数学に記述式問題を導入し、英語は民間試験を活用して「読む」「聞く」「書く」「話す」の4技能をみる予定でした。しかし、家庭や地域による受験機会の格差、採点の公平性などが問題となり、萩生田文科相が2019年にそれぞれ見送りを表明。学習指導要領の改定に伴う2025年の共通テストの刷新に合わせて、改めて導入するかどうかを有識者会議で検討してきました。

これまでの議論で、記述式問題は「採点ミスリスクはゼロにならない」「課題は容易に解決できず、個別試験での出題を促す以外の選択はない」などと断念する方向でほぼ一致しました。英語民間試験も4月20日の議論で、「試験によって会場数や受験料などが大きく異なり、公平性の確保が困難」といった意見が支持されました。

文科省の調査では、2019年度の大学の個別入試で英語民間試験を活用していたのは全体の約2割。記述式の出題は国立大は99.5%でしたが、私立大は54.1%にとどまっています。